

「知識がいろいろつくに従って、俗に『歴史の重み』ということへの感覚を自分自身にプラスしていく方向ではなくて、むしろ、かえって現実についての生き生きとした認識をさまたげる知識として身につけてしまいはしないだろうか」（梶村秀樹『排外主義克服のための朝鮮史』、平凡社）

- (1) 国会におけるヘイトスピーチ問題への取組み 「内省と謙虚さ」（梶村）の視点から
- (2) 「現場」に立つことで見えてきたヘイトスピーチ問題 認識の深化
- (3) 「存在しないことにされた」差別の煽動 メディアの責任
- (4) 当事者のまるごとの人生が国会議員の認識を変えた 川崎市桜本の闘い
- (5) 「表現の自由」を墨守する憲法学者との対話 「調査なくして発言権なし」
- (6) それでも深く存在する認識の限界 ある在日3世からのメール
- (7) ヘイトスピーチ対策法をどう評価するか 経過と問題点
- (8) 「人権大国・日本の構築」（法務省 平成28年度方針）
- (9) 「現場」－「専門家」－「当事者」－「国会」の有機的連携が現実を動かす
- (10) 「人権問題に終わりはない」 近代日本の差別意識を掘り崩す課題

(以上)